
クライムウォーズ

天道零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クライムウォーズ

【Nコード】

N3720J

【作者名】

天道零

【あらすじ】

人類は宇宙進出を果たして数年。それなりに平和に過ごしていた。・が、突如現れた宇宙からの侵略者によってその日常は破壊された。主人公：黒鐘遊里くろがねゆうりは、パートナーとされたエレナ・キャンベルと一緒に対侵略者用に開発された機体：エターナルで戦うことに。果たして、平和は取り戻せるのか。

第一話（前書き）

初めてロボットものを書いてみました。おかしいところは多々ある
と思いますがよろしくお願いします。

第一話

ここは、日本の琵琶湖周辺。今ここでは、宇宙からの謎の侵略者（ルビナフ帝国）と地球の総力を集めた特殊部隊アルビスの最終決戦中。途中までは、こちらの優勢だったのだが敵のボスが出てきてしまつて、一気に形成逆転されてしまった。このままでは……

「遊里ゆりッ！！」

「ッ！？」

ボスの機体から放たれた全方位ビーム砲を間一髪回避することができた。俺の機体：エターナルは、全体的にスラッとした感じだ。天に向かつて突き出た二本の角と二つ目の頭部。戦闘機を思わせる胴体を持った、機動性重視の機体。そして、ボスの機体：アルヴァは、簡単に表現するなら鬼だ。二本の角と髪が生えたような頭部。無骨な装甲の鎧を持つ胴体の背中には、マント付き。

「遊里ッ！戦闘中にボーっとしないで！」

「わりい！エレナ！」

言い忘れたがエターナルは、俺とエレナ（女）の二人乗りだ。俺が機体の前側で戦闘関連の操作、後ろでエレナが火気管制やエンジン（こいつにはルビナーズエンジンLEEとゆう特殊なのが積んである）の出力調整などを行っている。このLEEを積んだ機体は複数あり、エターナルは第三世代にあたるものだ。

「遊里。こいつは何か違和感があるぜ？」

ふと、仲間の始が通信を送ってきた。始の機体：グレイブは、遠距離タイプの機体だ。こいつにもLEは積んであり、同じ第三世代だ。外見のな違いは特にないが、頭部にスコープのようなバイザーがついていて、両肩に小型ミサイルポッドが、両腰には短銃装備。右手には、スナイパーライフル、左腕には小型化されたシールドが一樣装備されている。

「何が？」

「なんていうか・・・不完全っぽい感じがするんだ・・・」

「なっ・・・」

これで不完全？バズーカのような武器一発で山一つが吹き飛ぶのにか？・・・馬鹿な。

しかし、こいつの勘の鋭さは尋常じゃない。おそらく、本当に不完全なのだろう。だが、これで不完全なら完成したら、いったいどんな化物ができあがるんだ？

「・・・どっちにしろここでやつらとのケリをつける」

「・・・そうね」「うん」

エレナと始が同時に返事をする。通信は開きっぱなしなので、仲間全員に伝わっているだろう。俺は、一度深呼吸をして操縦桿を握りなおした。

「エレナ、LE全リミッター解除。オメガクラッシュを使う」

「ええ、わかつたわ！」

解除を確認して、アルヴァに対してブースト全開。向こうもこちらに気づいた。しかし、始や他の味方機からの一斉援護射撃によって、うまく身動きが取れていない。それか、あの鎧に絶対的な自信があるようだから、ワザと動かないか……。どっちにしる好都合だ。

「くぬっ！ちまちまと小ざかしいんだよっ！」

とうとうボス：レオナルドは怒りだし、アルヴァの腰に差していた剣を横に薙ぎはらい、多数のミサイルを一掃した。その爆発の煙幕で、アルヴァの視界を塞ぎその間に俺は、エターナルの背部に装備されている二本の巨大な剣：クファイアソードを抜き放ち肉迫。アルヴァの鎧にクファイアソードで、一振りずつ切りつけるが、大した外傷はなし。

「効かないって言うてんだろお！」

「ふっ・・・まだだ」

アルヴァの剣の攻撃をバック宙で回避。そして、クファイアソードの背同士を合体させて両刃の巨大剣を腰ために構えて、またブースト全開。向こうは、攻撃直後で胴体ガラ空きだった。

「これでえー！！！」

「何っ！？！？」

先ほど切りつけた場所にクレイモアを突き刺し、そのまま突き抜ける。そして、振り返って驚愕。

「なっ!?!」

「そんな・・・」

オメガクラッシュはアルヴァの左腕と胴体の少しの部分を決っただけだった。しかし、俺や他のみんなが驚いたのはそこではない。

「再生してやがる・・・」

そう、アルヴァは再生能力を持っていた。傷が直りつつあった。ここで、俺は致命的なミス犯していた。驚きのあまり動きが止まっていたのだ。レオナルドはその隙を見逃さなかった。剣でエターナルの左腕を持っていた。

「きゃああああ!!!!」

「エレナッ!!」

「・・・大丈夫よ!それよりも」

俺の前のモニターにアルヴァの傷口をズームした映像が現れた。俺は、エターナルを操作してアルヴァの斬撃を回避しながらエレナに問う。

「何だあれ?」

「おそらく、核^{コア}よ。あの再生能力は多分あれのお陰。だから」

「あれを壊せば・・・」

「きつと・・・」

「よし」

エターナルの頭部バルカンで牽制しながらすこし距離を取り、残った右腕でクレイモアをもう一度構えて、ブースト全開・・・のはずが。

バコオオン！！

「何だ！？」

「さっきのでブーストが！」

「くそ・・・はっ！？」

いつの間にかすぐ目の前にアルヴアの姿があった。このままでは・・・。そう思った俺はエレナを緊急脱出させた。

「えっ・・・遊里？」

「お前は生きるんだ・・・エレナ」

「ゆううううりiiiiiiii！！！！！！」

アルヴアの剣がエターナルのコックピット近くを貫いた。仕返しとばかりにこっちは、核をクレイモアで切りつけた。その時、限界を超えたエターナルは大爆発を起こした。爆発の中から中破したアルヴアが味方と一緒に離脱していた。その光景をエレナは、グレイブ

の手のひらから見ていた。その顔を涙でぐしゃぐしゃにして……

「遊里……いやあああああ!!!!」

エレナの叫びに呼応するように空から雪が降り始めていた。

第一話（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第二話：再会

あの日、琵琶湖でのルビナフ帝国と特殊部隊アルビスの戦いから今日でちょうど1年たった。ルビナフ帝国は、皇帝レオナルドのアルヴァの敗北により戦線を離脱。この一年間、ちよくちよく戦闘はあったが大きなものはなかった。アルビスの方は、主力機のエターナルの大破同時にメインパイロットの黒鐘遊里くろかねゆうりの死亡（一部納得していないもの達がいるようだが……）。

こちらは、新型の機体：第四世代が数機ロールアウトしていた。が、敵の本拠地がうまく特定できていないので、大した戦果はなかった。俺はその戦いの跡を見ながらため息をついた。俺の名前は、御堂雪みどうせつ。一年前、戦いの終了した後、この岸で怪我を負った状態で拾われた。そんな俺の元へ一人の老人が近づいてきた。

「雪、またここにいたのかい？」

この老人の名前は、御堂元治みどうげんじ。ここで俺を見つけ、手当てして世話をし。そして、記憶のない俺に御堂雪の名を与えてくれた人だ。ちなみに名前の雪の由来は、見つけたときに雪が降っていたからだそう。

「はい……」

「前にも言ったが、無理に思い出そうとしなさんな」

「……分かってます」

急がば回れ……。か。前に元治さんに言われたことを思い出す。

確かに、そんな簡単に記憶が戻るわけがないな……。はあ、
とため息をつく。

「そろそろお昼にしよう、雪」

「はい……」

どうやら元治さんは、お昼ご飯ができたことを知らせにきてくれた
ようだった。俺は頭の奥に何かが引つかかっているのを、気にしな
がら元治さんと一緒に家に帰ることにした。

「―――^{アルビス}特殊部隊の基地―――」

ここ、極東支部のドックではアルビスの運用艦：クリムゾンが停泊
中であり、搭載されている第四世代機他の機体の整備中である。そ
んな中、主力パイロットのエレナ・キャンベルは自機：アークエル
スの前で整備班長の巖島俊吾とアークエルスや他の機体のパワーア
ップのことを話しあっていた。

「エレナ、現状ではこれ以上は無理だ」

「そんな！？もうパーツが届く頃じゃなかったの！？」

「それが……偽装は完璧だったはずなのだが、なぜか向^{ルビナフ}こうさん
にばれて……それで……」

「くっ……」

そんな……。早くこの戦いを終わらせてどこかにいるはずの遊里を
探さなくちゃいけないのに……！

エレナはきつく奥歯を噛み締めた。アルビスの中で、遊里の生存を信じているものはもうエレナと始、そして俊吾の三人だけになってしまっていた。もちろん、一番信じているのはずっとパートナーを組んできたエレナだ。

そんな、エレナの心情を読み取ってか俊吾がエレナの肩に優しく手を置いて、言い聞かせるように言った。

「気持ち分かるが、怒りに自分を忘れるんじゃない。今は、いなが遊里だって帰ってきたときにお前がいなかったら今のお前と同じようになってしまう」

「……ごめんなさい」

しばらく、エレナは立ち尽くしていた。そして、数分たったところに突然俊吾が叫んだ。回りで整備をしていた他の整備士たちも何事かとこちらを向いていた。

「ど……どうしたの？」

「思い出したんだよ！」

「何を？」

「パワーアップのことだ！きっと、あの人なら……」

「えっ！？誰！？誰なの！？」

「その人の名前は、御堂元治。第一世代のシンフォニアの基礎設計からその他もろもろと、この機体たちの生みの親だよ」

それを聞いた瞬間、エレナは安堵した。これで遊里を探しに行くまでの時間が縮まったはずだと。一刻も早くその人の下へいかないと・

「で、どこにいるの？」

「きつと――」

――元治宅――

昼食も終わり、雪と元治は各々自由にくつろいでいた。すると、どこからか車のエンジン音が聞こえてきて、この家の前に止まったように聞こえた。雪と元治は、互いに顔を見合わせて雪が出ることにした。

「どちらさまですか？」

玄関を開けるとそこには、雪よりも少し身長が低く、金髪の髪をポニーテイルにした、スレンダーな女性が立っていた。彼女は、応対に出た雪の顔を見て驚いたように目を見開き、涙を浮かべながらもまだどこか信じられないといった顔で雪をこう呼んだ。

「ゆづ……り……?」

第二話：再会（後書き）

これからも、更新は不定期になると思いますがよろしく願いします。
よかったら、感想をお願いします。

第三話：自分の正体

「遊里っ！やっぱり生きていたのねっ！！」

そう涙ながらに言つてその女性は、俺に抱きついてきた。俺は何がなんだかわからないが、この女性を知っている気がする。よく見ると開いたままのドアには他にも二人の人物がたっていた。片方は、今頃の若者のような服装だが派手すぎず、地味すぎずな服装で。髪はツンツンにたっていて、整った顔立ちにピッタリだった。そしてもう片方は、少し汚れた作業着を着たおじさん。がたいが良くて、いかにも「おやっさん」って感じの人だ。この二人も俺を見てやはり驚いていた顔をしている。まあ、そんなことはいいか。今はこのひとが誰かをはつきりさせないと。

「え．．．えと、あなたは誰ですか？俺を知りあいなのですか？」

「え．．．．遊．．里？」

まただ、この人は俺のことを遊里と呼んだ。ということは、それが俺の本当の名前なのか？記憶を呼び起こそうとすると頭痛がしてきた。

「遊里．．．．それが俺の．．名前？」

「遊里．．．まさか、記憶が．．．？」

俺の言動に女性と男二人は、さきほどよりも驚きを深くしていた。そんな場の雰囲気を見かねてか、元治が出てきた。

「その通りじゃよ、エレナ・キャンベルさん」

「え、私の名前を知っているの？」

「もちろんじゃ、その辺の情報はちよくちよくその俊吾が頼みもしないのに知らせて来ていたからの」

元治の言葉にエレナと呼ばれた女性が俊吾（おやつさん風）の方を向いた。俊吾は黙っていたことを反省しているようにゆっくりと頷いた。そこで、落ち着いたかのように見えたエレナが再度俺のほうを見て問いただしてくる。

「ねえ、本当に何も覚えていないの！？私のことも！？この始のことも！？特殊部隊アルビスのみんなのことも！？エターナルで一緒に戦ったことも！？」

アルビス・・・エター・・・ナル？その言葉を聴いた瞬間、一瞬過去の記憶と思われるビジョンが脳内に映った。苦しい・・・大量の情報が一気によみがえってきて、頭が割れそうだった。俺は頭を抑えて軽くふらついた。

「あ・・・あああ！！！？」

「遊里！？」

「いかん！それ以上はやめるんじゃ！こいつは今まで十分苦しんできたんじゃ、無理に思い出させようとするな」

元治が俺を支えながら、エレナを叱った。元治が俺を気遣って部屋で休むように促した。俺はもつと話を聞けば記憶が戻るかもしれない

いと思ったが、今の状態では無理だったので素直に従う。そんな俺のことをエレナたちは反省と名残惜しさの表情で見送った。俺が部屋に戻ったのを確認すると、元治は三人に座るように言って、自分は対面に座る。

「エレナさん、さっきはいきなり怒鳴ってしまつてすまなかつた。まさか、君たちが今日ここにくるとは聞いていなかったものでな」

そういつて元治は、軽く責める視線を俊吾に送る。それだけで、俊吾は蛇に睨まれた蛙のごとく固まつてしまった。エレナは心から反省しているような顔でうな垂れていた。

「いえ・・・私こそいきなり・・・すみません」

「いやいや、君の気持ちは良くわかるつもりじゃ。お互いに信頼しあっていたパートナー同士だったのじゃろう？」

「はい・・・そうです」

信頼しあっていたパートナー。その言葉は盗み聞きしていた雪の心を震わした。胸を押さえながら俺は思った。やっぱり・・・俺はあいつを知っている。多分、他の二人のことも・・・

第三話：自分の正体（後書き）

よかったら、感想をお願いします。

第四話：今度は私が・・・（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした。

第四話：今度は私が・・・

全員が落ち着くまでに数十分の時間を要した。今は、皆席について元治の出したお茶をすすっているところだった。このままでは、話は進まないと思ったのか三人の対面に座っている元治が口を開いた。

「・・・それで、いきなり来てなんのようだ？」

「第四世代機のパワーアップのことでお話に来ました」

「・・・やっぱりか」

どうやら元治は俊吾が何のことで来たのか分かっていたようだった。俊吾は驚いて、何故わかったのですか、と聞いた。すると、

「ふん、最近のお前さんから送られてくるやつの中に、ちよくちよくその辺のことがあったからの」

「あつ・・・」

俊吾は思い当たる節があるのか、少し顔を赤くした。その顔を見て元治はもう一度鼻を鳴らした。ここで、初めて始が口を開いた。

「・・・あいつらを倒す力を下さいとは、言いません。ですが、ようやく見つかった遊里や他の仲間、何より自分の大切な人たちを守る力が欲しいです。だから、お願いします！何かアイディアを下さい！」

大切な人を守る力、それはこの一年間エレナが一番欲したものだ

その言葉は隣のエレナしか聞こえないほどの小さな声だった。どういう意味か聞こうとすると、一機の人型兵器（通称：コンパイル）がこちらに向かってきていた。

「みんな逃げろー！！」

元治の怒声。しかし、みんな間に合わないと分かっていた。誰しも覚悟を決めたときだった。どこからか一筋のビームが飛んできて、コンパイルを破壊した。それと同時にエレナが持っていた通信機が鳴った。

『大丈夫かい？お前たち』

「荒井艦長たふっ！？どうして」

通信機から聞こえてきた声は、アルビスの運用艦：クリムゾンの艦長。荒井尊あらいみことだった。彼女は、時間がないといい、そして

『あんたたちの機体ももってきてるから、今からその家の近くに落とすから急いで乗りな』

聞こえ終わると同時に頭上のクリムゾンからエレナのアークエルスと始のグレイブ改が文字通り降ってきた。それを確認すると、始は走り出した。エレナはというと、呆然としていた雪（遊里）に抱きついて、こう囁いた。

「今度は私が守るから、必ず」

そう言ってからエレナも外に飛び出して、機体に搭乗した。そして、始と一緒に戦場に飛び立った。

第四話：今度は私が・・・（後書き）

次ぐらいで一樣終わろうかなと思っています。それまで、よろしく
お願いします。

よかったら、感想をお願いします。

第五話：眠れし力

エレナと始が行ったのを見送った後、元治が「俊吾、雪、付いて来なさい」と言つて、元治の部屋へと二人を誘導した。元治は入るとすぐに目の前にある大きな本棚に向かい、その内の分厚い本二冊を一気に押し込んだ。すると、本棚が横にスライドして地下へと続く長い階段が現れた。元治は「行くぞ」と一言喋つてさっさと降りていった。啞然としていた二人はすぐさま元治の後を追った。

「この下に何かあるんだろうか？」

「俺にも分かりません」

俊吾が疑問を投げかけてくるが、俺に答えられるはずもなかった。でも、一つだけ分かることがあった。それはこの地下が、そしてその先にあるであろう空間が馬鹿でかいであろうということだ。

「着いたぞ」

先頭を歩いていた元治が声をかけて来た。三人で自動ドアをくぐる。その向こうに広がっていたのは、

「うわ・・・あ・・・」

「これは・・・!？」

雪と俊吾はさつきからだただただ驚くばかりだ。そんな二人の様子を

見て元治がふふん、と鼻を鳴らして

「これは私がここに住み始めて少しずつ作ってきたものだ」

そこはよくアニメなどで出てくる司令室のような感じだった。正面に大きな画面、いくつかのパソコンが置いてあった。元治は正面モニターのところでは機械を起動したようで、画面には外の戦闘の様子が映し出されていた。そして今、エレナの乗ったアークエルスが映っていた。俺はいつの間にか画面の前まで言っていた。

「エレ・・・ナ・・・」

「大分苦戦しているようじゃの」

力的には、こちらが勝っているようだが向こうは数で押し切るつもりらしい。回りはすっかり囲まれていた。そして、とうとうアークエルスが押し切られて山に落ちていった。俺はその映像を見ながら無意識のうちにこう思った。

力が欲しい・・・と。

なぜかは分からない。けど、俺にとってエレナは大事な人なんだろう。今の俺になにができるかわからないが、それでも急いで彼女の元に行きたかった。

俺はいつのまにか壁に拳を叩きつけていた。そんな俺の肩に置かれた手があった。後ろを振り返ると、元治が真剣なまなざしで俺を見ていた。そして、

「行きたいかい？雪・・・いや、彼女らが現れた以上もう遊里と呼ぶべきかな・・・」

最後の方は寂しげな思いが伝わってきた。元治の眼を見つめ返しながら、

「あなたにとって俺が雪なら、そう呼んでください」

「……分かった」

こう言うと、元治は元のシャツとした表情に戻って頷いた。そして、

「付いて来なさい、雪」

元治に促されて奥にあった大きな扉を抜けるとそこには、

「……」

エレナは怒っていた。それは遊里との再会を邪魔されたからでもあるし、もう遊里は失わせないという思いが体を支配していたからであった。その雰囲気伝わったのか、艦長の荒井が始めに通信を送った。

『何か今日は一段とすごいけど、下で何かあったのかい？』

「やっと、見つかったんですよ！遊里がっ！」

『えっ……』

荒井は唖然とした。いや、荒井だけじゃない、会話を聞いていた乗組員全員が唖然とした。死んだと思われていた遊里が生きていた、

この事実は遊里のことを知っている人にショックを与えるには十分だった。艦が被弾してようやく時が動き出した。

『そうかい・・・生きてやがったのかい。あの暴れん坊・・・』

「ええ、それで、エレナ・・・今度は自分が守るからって・・・」

『・・・よしっ！なら、お嬢ちゃんの王子様をみんなで向かえに行くかいね！』

荒井の声と同時に船内のいろんな場所で歓声が上がリ、こちらの士気が一気に上がった。

『さあ！気合いれていくよ！！』

第五話：眠れし力（後書き）

次で本当に最後になると思いますので、よろしくお願いします。
よかったです、感想をお願いします。

最終話：新たなる決意とともに

くぐった先には巨大な空間があり、そこには巨大な影があった。最初は暗闇だったが元治がライトを付けると、

「・・・あ」

「これは・・・エターナル？いや、ところどころ違う」

それは赤と黒のツートンカラーの機体。鋭角的なフォルムに特徴的な一本角。両手には二丁の小型銃。背中には二本の巨大な剣。何より二枚の翼があった。これを眼にした瞬間失った記憶にひっきりを感じた。

「これもここに来てから作ったものじゃ。きちんとルビナーズエンジンもつんどる」

俺には分からなかったが今の元治の言葉に何かあったのか、俊吾が、

「LE？どうしてそれを・・・まさか」

言っていて気づいたのか、顔色を変えた。元治はよく気づきましたと言わんばかりの顔で、

「」名答。こいつのLEはエターナルから回収して、手を加えたものじゃ」

それを聞いて俊吾は何か納得したようで、元治に、

「それで、こいつの名前は？」

「ノワールタートじゃ」

元治はすごく自慢げな顔で言った。俺はもう一度そいつを見上げてつぶやいた。

「ノワールタート・・・」

その横で俊吾が恐る恐るといった感じに元治に質問した。

「元治さん・・・こいつはコックピットが二つありますね？」

確かに、映像で見たのと多少の誤差はあるだろうが、エレナのアイクエルスや始のグレイブ改よりもノワールタートは一回りほど大きかった。その問いに元治はどこから持ってきたのか、一着のパイロットスーツをもっていた。

「ふっ・・・やはり気づきおったか」

「では？」

「・・・うむ、いつかはこういう事態になるとおもったからの」

元治はやっぱりこうなってしまったか、といった顔で肯定した。そして、俺に向けてスーツを差し出して、

「本当に行くのかい？」

心から寂しそうな顔でこういった。それに対して俺の答えはもう決まっていた。

「・・・はい。あの人が待ってますから」

「・・・わかった」

そして、元治からスーツを受け取って俺はノワールタートに乗り込んだ。元治や俊吾の指示を受けながら操作してシステムを起動した。その時にハンドलगリップの感触などが何か懐かしかった。それが分かったのか元治が、

『懐かしいだろう？中はだいたいエターナルと同じにしてあるからの』

それを聞いて、そうか・・・だからか。と素直に納得できる部分があった。そして、ノワールタートの真上のハッチが次々と開いていて、小さな青空が見えた。

『ノワールタート発進準備完了・・・行つてらっしゃい、雪』

「行つてきます・・・ノワールタート、発進しますっ！！」

俺はアクセルを大きく踏み込んで空へと飛び出した。

！・・・

迫り来る敵機をミサイルやビームライフルで打ち落としていくが、

とうとう弾切れになった。そして、
全速で突っ込んできた敵に対応しきれずに、アークエルスは一緒に
山に落ちていった。

「きゃあああああ！！！！！」

衝撃のせいでどこかが故障したのか、アークエルスが反応しなくな
った。目の前では敵が接近戦アックスのような斧を振りかぶった。始や他の仲
間たちは間に合わない。エレナは眼を閉じて死を覚悟した。だが、
次の瞬間

ドゴオオオオオン！！！！

と、爆発音がした。エレナはゆっくりと眼を開けた。すると、そこ
には二枚の翼をもった赤と黒のツートンカラーの機体があった。ど
うやらそれが敵を撃破したようだった。それはこちらを向くと近く
で跪いて、右腕をアークエルスのコックピットに差し出した。エレ
ナがいぶかしんでいると、そのコックピットが開いて一人の人間
が降りてきて、ヘルメットを脱いだ。エレナは我が目を疑った。眼
から涙が止まらなかった。そして、彼が両手を広げた。

「大丈夫？」

「遊里っ！！」

エレナは急いでコックピットから出て、遊里の胸に飛び込んだ。俺
はエレナの頭をヘルメット越しに撫でながら、

「無事でよかった・・・」

「遊里・・・どうしてここに」

「その・・・なぜかいてもいらなくなっただから」

俺はなぜか恥ずかしくなつて、余所見をした。とりあえず、エレナをなだめて、

「一緒に・・・戦おう。この世界の人たちのために。そして、お・・・俺たちのために」

「ふふ、ええ！行きましょう、遊里」

そして、二人でノワールタートに乗りこんだ。それから、ノワールタートは翼を広げて飛び立った。

地球のみらいのために・・・そして、自分たちのために・・・

最終話：新たな決意とともに（後書き）

短い間でしたが、今までありがとうございました！これからはもう一つの「平凡男は実は最強!？」に専念していくつもりなので、よかったら見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3720j/>

クライムウォーズ

2010年10月9日07時03分発行